

センターだより



お疲れ様!!

目次

- 新年を迎えて 1
- いちご一会とちぎ大会への参加 2
- 蛍の答礼～コロナ禍での交流～ 3
- スポーツ大会の開催に向けて 3
- 「再び出逢う」全国大会 4
- 自動車旋回装置の紹介 5
- 障害者週間記念講演について 6
- 地域移行された方の今 7～8
- 終了者の状況、利用者募集のご案内 裏表紙



新年を迎えて

所長 白浜 一

新年明けましておめでとうございます。皆様におかれましてはつつがなく新しい年をお迎えのこととお慶び申し上げます。また、日頃から関係機関、地域の皆様から温かいご支援やご協力を賜り、心から感謝申し上げます。

昨年は、世界ではコロナ禍に加え、ロシアのウクライナ侵攻、パキスタン洪水(国土の3分の1が水没)、北朝鮮のミサイル、日本では円高、燃料費の高騰、食品等の値上げ、安倍元首相の銃撃事件等、国内外で社会をゆるがす出来事が多く、難しい世の中になってきた一年であったように思います。

さて、わが国立障害者リハビリテーションセンターは、今年、第3期中期目標(令和2年度～6年度)の4年目を迎えます。組織の一部門である自立支援局(所沢、函館、神戸、福岡、別府)は、提供する障害福祉サービス、支援体制等の将来像の検討を組織目標に掲げ、現状把握とデータ分析、課題整理(利用者の減少、障害者の高齢化、障害の重複化、障害者の地域生活、職員の資質の向上等)を行うとともに、障害者のニーズや障害者を取り巻く社会情勢、障害者数、利用者像(障害像)、取り組むべき事項等も踏まえて、自立支援局として、どのようなサービスを、どのように提供、情報発信していくのか、その支援体制等の再編に向けて検討を進めているところです。

第3期中期目標の期間も残り2年となりました。この2年間に、自立支援局の将来像について検討した結果をオープンにして、その方向性に向かって準備が進められていくものと思っています。

このことを頭に入れて、別府センターとしても、頸髄損傷者に対するリハビリテーションを発展させるべく、これまで以上に研修会の開催や研修生の受入れ等による医療機関や関係機関等へのノウハウ伝授並びにSNS等を活用して、よりわかりやすい支援ノウハウや支援機器、住環境整備等の情報発信、国リハ研究所をはじめ、研究機関等との連携による頸髄損傷者のリハビリテーション技術開発等を具体的に進めていくこと。また、これまでの頸髄損傷者に対するリハビリテーションの実績に甘んじることなく、新たな挑戦や取組を模索・試行していくことが国立施設としての役割だと認識して、今年も努力して参りたいと思いますので、今後ともご支援ご協力を賜りますようよろしくお願いいたします。

最後に、今年も皆様にとって、より良き年になることを祈念いたします。



いちご一会とちぎ大会への参加

医務課 作業療法士 佐藤 裕也

前号でもお知らせしました全国障害者スポーツ大会出場の機会を得たN氏のその後の経過を報告します。合同練習会や個別での自主練習を行い、本番に向けた準備を進めてきました。

コロナ禍により3年ぶりの開催となった、今回の国体。現地入りして3日目となる10月29日(土)、開会式がかんせきスタジアムにて開催されました。式典には秋篠宮皇嗣同妃両殿下も臨席され、開会宣言、歓迎行事式典が行われました。

試合当日、大分県はPプールに割り当てられ、神戸市、浜松市との対戦で順位を争います。1戦目の対神戸市戦では、ともにジャックボールへ寄せ合い、一時対等な状況も生まれましたが、その後の相手側のガードボールに阻まれ今一つ及ばず、4-2で敗戦。



その後の対浜松市戦では、浜松市が先行を取り、浜松市の選手がジャックボールへ次々にベタ付けしていきます。N氏の投球コース前はガードががっちり固められてしまいました。間隙を縫うように投球を行いますが、攻め入る隙を与えてもらえず、4-1で敗戦。惜しくもプール内3位という結果に終わりました。

喜びに浸ることは叶いませんでしたが、競技後にはN氏の地元のチームからセンター退所後に練習会へのお誘いをいただくなど、勝負以外の部分での実りを得ることができました。

羽田空港内の到着口までのオートウォークを乗りこなし、丸の内ビジネス街を勢いよく漕ぎ抜け、競技場や那須塩原の町を介助なしで移動するN氏の姿には、入所時とは比べ物にならないほどの頼もしさを感じるとともに、充実した数日を過ごすことができたように思います。

準備・手配いただいた大分県障がい者スポーツ協会の皆様、現地でのサポートをいただきました窪埼様、星野様につきましても誌面上にて御礼申し上げます。ありがとうございました。



夕焼けに染まるかんせきスタジアムー開会式



羽田空港内を移動中の様子

蛍の答礼 ～コロナ禍での交流～

支援課 主任就労支援専門職 阿部 真市

当センターでは、昭和41年から毎年、竹田市立南部小学校の児童と交流会が行われてきました。例年、6月には「蛍の交歓会」として児童が当センターを訪問、11月には「蛍の答礼」として当センター利用者が南部小学校を訪問し交流を図ってきました。新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、ここ数年は実施を見送っていましたが、今年の6月、3年ぶりにオンラインという形で蛍の交歓会を開催することができました。

今年の蛍の答礼は、コロナ禍であることを踏まえ、当センターと南部小学校それぞれで動画を撮影し、それを交換することで交流を図ることとなりました。当センターの動画は、利用者のKさんを中心に、3名の利用者の現在取り組んでいる訓練の様子などを撮影、編集しました。

12月8日(木)にKさんと職員で南部小学校を訪問し、校長先生に準備したDVDを手渡しました。今後、当センターの動画を受けて、児童が動画を撮影してくれることとなっています。

コロナ禍により従来の形とは異なるものとなりましたが、50年以上続く歴史を絶やさぬよう、創意工夫しながらも交流を続けていければと考えています。



DVDを校長先生に渡すKさん

スポーツ大会の開催に向けて

支援課 生活支援専門職 吉川 杏美

新型コロナウイルス感染症の流行に伴い、センター行事の多くは開催できない状況が続き、毎年恒例だったスポーツ大会も2年間未開催となっていました。この間、利用者の方々からは「年に一度でいいから、行事ができると嬉しい」、「行事ができるといいな」といった声が聞かれました。

こういった声を受けて、利用者の方々が集い、楽しい時間が過ごせるよう、スポーツ大会の実施に向けて検討を重ねてきました。その結果、利用者が楽しめ、接触や密を極力避けられる内容として、モルック大会を開催することになりました。モルックは当センターのスポーツ訓練のプログラムで実施しており、利用者の方々にも馴染みがあり、誰もが盛り上がる競技です。(モルックのルールについては、センターだより第96号-令和4年1月発行-をご参照ください)感染状況を踏まえ、現段階では開催に至っておりませんが、準備は整いつつあります。今回企画したモルック大会をはじめ、コロナ禍でもできる行事の開催に向けて、検討を継続していきます。

「再び出逢う」全国大会

医務課 介護福祉士 本田 貴大

令和4年10月に開催された第29回日本介護福祉士全国大会・第20回日本介護学会inかながわに介護福祉士2名が参加しました。同大会は、令和2年度が新型コロナウイルス感染症の影響で中止、令和3年度はオンライン開催でした。そして令和4年度はオンラインも併用しつつ現地での開催（ハイブリッド開催）となり、「再び出逢う」全国大会となりました。私たちは現地で参加しましたが、会場に入る際は主催者が用意したマスクに交換し、出入口での手指消毒が徹底され、しっかり感染対策がなされていました。

今回の全国大会・学会は“逃げる・生きる・整える”というテーマで開催されました。自然災害や感染症に翻弄されている今、介護福祉士は災害の現場や感染症と闘う福祉現場の一員として如何にして専門性を発揮し、困難を乗り越えていくかを問われた大会でした。

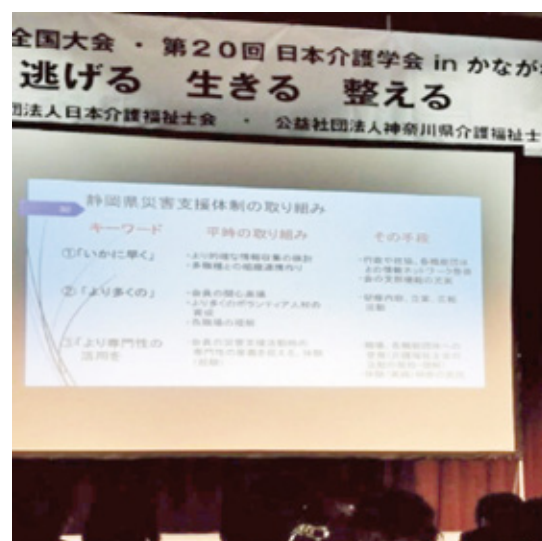
大会では、令和3年に起きた熱海の土砂災害や各地で起きた水害でのDWAT（災害派遣福祉チーム）の実績、老人ホームでの避難訓練の実態などの発表がありました。恥ずかしながら知らなかったことも多くあり、改めて気が引き締まる思いとともに災害に対する自身の考え方も変わったように思います。

大会を通して発表者の方々が口を揃えておっしゃっていたことは「災害に関心を持つことが非常に重要である」ということでした。平常時から災害に対して警戒し、職場や自宅、地域の災害に対する備えは十分だろうかと考え、定期的に振り返りを行う事が大切で、関心を持ってアンテナを張っていると色々と気づきがあるとのことでした。さらに私たちは介護福祉士として、身体が不自由な方の避難支援や、避難所での介護支援など、求められる役割が多くあることも学びました。

当センターでも様々な災害を想定した避難訓練を定期的に行い、振り返りを行っています。今後もいつ何時起こるかわからない災害を正しく恐れ、関心を持って防災に取り組みたいと思います。



会場の様子



発表の様子

自動車旋回装置の紹介

医務課 主任理学療法士 時枝 陽子

理学療法室では自動車関連動作習熟後、自動車免許の条件書き換えを行い、自動車の改造のアドバイス及び自動車での動作習熟訓練を行っています。今回は、旋回装置の紹介をします。

旋回装置(旋回ノブ)は、左手で手動運転装置を使用しアクセル・ブレーキ操作を行う場合や、手指機能に障害があり、ハンドルを握って旋回できない場合に使用します。手指に障害がなく、右手のみでハンドル旋回を行うことができる方は丸ノブを使用します。手指機能に障害がある方は上肢の機能に応じて横型や縦型を使用します。以前は、オーダーメイドで作成していましたが現在は既製品を使用しています。着脱式は、台座のボタンを押すと握り部が着脱でき、ご家族兼用車にお勧めです。その時、オフセットタイプにすることでノブの位置をハンドル上にでき、センタータイプより操作が軽くなります。

【丸型】

握りやすく直径の種類があります



【T字型】

指やこぶしを乗せやすい



【Y字型】

握力が弱く手が抜けない方に



【手掌ノブ 横型】

握力が弱く旋回時に手が抜けやすい方に



左から S・M・L

【手掌ノブ 縦型】

握力が弱く旋回時に手が抜けやすい方で肩周囲の筋力が弱い方に



左から S・M・L

今後も頸髄損傷の方に対して、よりよい訓練を提供できるよう、スタッフの知識・技術の向上を図るとともに、訓練機器の整備を行っていきます。

障害者週間記念講演の開催

庶務課 主査 丸山 由紀子

毎年、12月3日から9日は障害者週間です。今年は3年ぶりの対面方式で、当センター利用者(以下、「利用者」という)及び職員を対象に記念講演を開催しました。今回は「相談支援専門員の役割」というテーマで、社会福祉法人農協共済別府リハビリテーションセンター障害者生活支援センターの青山昌憲課長に講演をしていただきました。主任相談支援専門員でもある青山課長は、利用者の定期的なモニタリングでもお世話になっており、センターでは顔なじみも多い方です。



ご講演中の青山課長

講演では、利用者の状況(遠方から来られている方が多いこと、センター終了後は地域生活となること)を踏まえ、地域生活で知っておくと良い情報(所得補償、サービス内容、制度等)を中心にお話いただきました。このような情報とのつながりを作るために、「自立は依存先を増やすこと」という小児科医で東京大学先端科学技術研究センター・特任講師の熊谷晋一郎先生のお話を交えながら、つなぎのプロである相談支援専門員を活用してほしい、というメッセージは、利用者の皆さんに十分に伝わったと思います。

講演の終盤では、地域によるサービス内容の格差や、遠方であるがゆえに事前の調整に限界があることなど、在宅生活における課題をいくつか紹介していただきました。センターで日常的に受けている、専門性を持った職員からの能動的なサポートは、在宅生活では決して当たり前のことではありません。自分のサポート体制を作り上げるのは自分自身であり、そのために地域の相談支援専門員と協働することの必要性を感じた方も多かったのではないのでしょうか。



講演中の様子

今回の講演は、利用者の皆さんがセンター終了後の生活をリアルに考えるきっかけとなったように思います。また、職員にとっても、利用者の皆さんが地域生活をする上で直面する課題を考える良い機会となりました。青山課長におかれましては、お忙しいところ貴重なご講演をいただき、ありがとうございました。

地域移行された方の今

支援課 主任生活支援専門職 中山 修司

今回は、自立訓練終了後に地元に戻り、ご家族と生活している〇さんをご紹介します。

〇さんは平成30年4月から令和2年6月まで当センターの自立訓練をご利用されました。センター在籍中はアーチェリーや車いすマラソンの大会に出場するなど、スポーツにも積極的に取り組んでおられました。その後、地元に戻り市内のご自宅にて家族と生活されています。

【生活状況】

当センターの在籍中に自宅を新築されました。〇さんとセンターで同期だった方が同じ地元で工務店を経営されており、今回の新築に携わってくれました。当センターで獲得した動作を自宅でもできるように、トイレとシャワー浴室はセンターの訓練室と同じ環境で作製されています。また、長時間過ごすトイレ内は〇さんの趣味全開の空間となっています。



トイレ、シャワー浴室

トイレ・浴室の隣には〇さんの部屋があります。こちらにはベッドやPCなどが設置され、〇さんが無理なく快適に動ける空間となっています。また、扇風機は音声対応で作動するものを使用するなど、家族からの介助を少しでも減らして生活できる環境を整えています。



自室風景

自室でPCを使った作業をすることもあるそうです。センターでは予定されていたPC検定試験を全て取得した〇さん。パソコンに馴染んだ経験が終了後も活かされているようです。

今では市役所に勤務し、パソコンを使った作業もされています。これについての詳しい話は、また後ほど。

一週間の流れとしては、月・水・金に勤務し、火・木・土は訪問看護を利用して排便やリハビリを行っています。センターで学んだアーチェリーも地元で継続されていて、毎週火曜日に身体障がい者福祉センターの体育館に通って腕を磨いているそうです。仕事とプライベートのバランスはほぼ完璧(本人談)とのことで、とてもバランスの取れた生活を送っておられます。



自室での作業風景

一日の流れ(勤務日バージョン)は以下の通りです。

5時半 起床 → 8時15分 介護タクシーで通勤 → 9時 勤務開始 → 12時 昼食(弁当)
→ 17時 勤務終了、公共バスで帰宅 → 入浴(1時間半程度) → 19時半夕食 → 21時就寝
〇さんは無理のない生活リズムで、とても上手に生活をコントロールされています。

【就労状況】

月・水・金の9時から17時まで、市役所の農林土木課に勤務してデータ入力を行っています。職場の理解もあり、入職時にトラックボールを購入してもらうなど環境面での配慮が得られやすいそうです。また体調面でも適宜、気遣ってもらえるのはありがたいと話されていました。基本的なことですが、安心して働けるのは大切なことです。

また、市役所人事課が主催する令和4年度働き方改革プロジェクトチームにもメンバーの一人として参画されています。今年は職場環境整備がメインの課題になりそうとか。〇さんは車



就労風景

椅子ユーザーとしてスポーツ観戦やライブ会場に足を運ぶことも多いそうですが、そういった経験も踏まえて、積極的に意見を発信するなど、精力的にお仕事をされているようです。



プロジェクトチームの打ち合わせ風景

生活スタイル、余暇、就労といった一連の生活リズムが〇さんの中で概ね完成し、ストレスなく生活ができている様子がまさにお見事！というのが率直な感想です。また、ご家族の存在やフォローも〇さんの大きな支えとなっている様子でした。センターでの経験が、今の〇さんの生活の礎の一部と

なっていることがとてもうれしいです。

職場では、一生懸命にお仕事に取り組んでいる様子が印象的でした。職場もアットホームな雰囲気、周囲の方のフォローが得られやすいというのも納得です。車椅子ユーザーとしての視点を発信することで、次に続く道を作っていくことになることにも期待しています。

長いリハビリ期間を経て、満を持して地域生活を送られている〇さんです。ここに至るまでご苦労されることも多かったと思いますが、今回お話を伺って、とても素敵な生活を送られていることに感心し、安心しました。これからも趣味に、仕事に、〇さんらしく全力で取り組んで行って下さい。応援していますよ！



終了者の状況

(令和4年7月1日～令和4年12月31日)

復帰形態	家庭復帰	就職	自営・内職	復職	就労移行支援	就労支援施設・能開校	他施設	進学復学	その他	計
人数	4	0	0	1	1	0	4	0	1	11
比率(%)	36.0	0	0	9.0	9.0	0	36.0	0	9	100.0

利用者募集のご案内

当センターが提供する障害福祉サービス

サービス名	サービス内容	利用期間
就労移行支援	パソコン訓練、維持訓練（理学療法、作業療法、スポーツ訓練）	概ね1年間程度（対象となる方の障害状況等によって最長2年間）
自立訓練（機能訓練）	理学療法、作業療法、スポーツ訓練、社会参加訓練等	利用開始後の概ね2週間で各部門が評価や面接を行い、その結果に基づき作成された個別支援計画書に定めた期間となります。
施設入所支援	自宅から通所が困難な方は、看護・介護等の支援を受けながら宿舎の利用が可能です。	就労移行支援、自立訓練の利用期間に応じて設定されます。

ホームページにはさらに詳しい情報を掲載しておりますのでぜひご覧下さい。

別府重度

検索

<http://www.rehab.go.jp/beppu/>

お問い合わせ先

国立障害者リハビリテーションセンター 自立支援局

別府重度障害者センター 支援課

住所 〒874-0904 大分県別府市南荘園町2組

電話 (0977) 21-0182(利用相談) FAX (0977) 21-2794

E-mail soudan-beppu@mhlw.go.jp

頸髄損傷者の自立訓練（機能訓練）は、下記の国立障害者リハビリテーションセンターの利用も可能です。

国立障害者リハビリテーションセンター

所在地 〒359-8555 埼玉県所沢市並木4丁目1番地
電話 (04) 2995-3100(代) FAX (04) 2992-4525(直通)

国リハ

検索

<http://www.rehab.go.jp/>